

私の顔を見つめ返した青年が「アッ・・・！」と叫んだ瞬間、私の頭の中はパチーンと火花が散って真っ白になっていた。自分でも何がなんだか解らないうちに肩にかけていたザックを地面に放り出し、ダッと青年に駆けよると体当たりするような勢いで彼の身体にギュツと腕を巻きつけていた。

「やっぱりあなたなんだね！！とっても会いたかったよ～！！亜丁の事を思い出す度に、いつもあなたの事を想ってたの！！もう会えないかと思ってた～！！！」

身体を離すと一気にそこまで喋ったところで、少し冷静になってきた私は急に恥ずかしくなってしまった。あまりに思いがけない再会の喜びに我を忘れて抱きついたりしてしまっただが、彼はもうあの時の子供ではなかったのだ。やんちゃで腕白人懐っこい少年は三年の間に背丈も伸びてハンサムな凛々しい青年に変わっていた。

ちょっとドギマギしながら慌てて傍で様子をみていたウィンに彼を紹介すると、私はズボンのポケットに入れっぱなしの手帳を取り出し、彼が自分の名前を書き入れたページを開いてみせた。

「これ覚えてる!? 三年前にあなたが書いたんだよ」

彼の拙い筆跡で「四郎旺堆」と書かれた横には、私の字で「スラウンドゥイ」と仮名がふってあった。

「アハハ・・・、俺の字はずいぶん上手だね」

「この時あなたは13歳だったんだよね？だから今は16歳でしょう？」

「俺は今18だよ」

あれれ？それじゃあ計算が合わないじゃないか。

あの時出会った少年が13歳だと聞いていたのは私だけではなかった筈だ。母が帰国後に作った旅のアルバムにも、一緒に旅行したKさんが後にわんりに寄稿された亜丁の旅日記にも、ちゃんと「亜丁で出会った13歳の少年」と書き込みがしてあった。

何だか合点がいかなかったが、本人が18だと言っているのだから間違いはないだろう。確かに目の前に立っている青年は、16歳にしてはもう少し大人のような気もするし、一般的に僻地の貧しい土地の子供達は体格が小さく幼く見えるので、私達が勘違いしていたのかもしれないし、チベット式では歳の数え方が違うのかもしれないし、彼が中国語を言い間違えたのかもしれないし、まあそんな事はどうでも良かった。美しい思い出の中の「幻の少年」として記憶の奥底に刻み込まれ、二度と会う事はないのだろうと思っていた少年と、あまりに突然にあっさりと再会できてしまったのだ。

まったくなんて偶然だろう。ここに来るまで旅行者を乗

せた騎馬隊の一群とは何度もすれ違ってきたが、その中に彼が混じっているなどとは考えていなかった私は、この時まで馬方の顔に注意を向けたりなどしていなかった。もしこれが歩いている時だったりしたら、荷物の重さにバテ気味の私は歩く事に精一杯で、旅行者を乗せた騎馬隊などに興味を引かれることもなくすれ違っていただろう。

亜丁に到着して以来の不愉快な出来事の数々で、ここに戻ってこない方が良かったのかもしれない、亜丁は美しい思い出のまま記憶の中にしまっておいたほうが良かったんじゃないかなどと沈みかけていた気持ちが、少年に再会できた喜びで大きく弾んでいた。

「今、どこに住んでいるの!? あの時の写真を送りたいけど住所が判らなかったの」

私の問いに、青年は意外にも現在は成都で勉強しているのだと答えた。

「ええ～!!成都!？」

「今は夏休みだから亜丁に戻っているんだ」

私の手帳に新たに書き込まれた名前と住所は、三年前とは見違えるような達筆だった。

ウィンも交え、暫く話しているうちに青年が言った。

「もうそろそろ行かなくちゃ。一応仕事中なんだ」

「また会えるかな？」

「俺は亜丁村に住んでいるんだ。村に来てくれれば必ず会えるから、亜丁を発つ前に村に遊びに来て」

「どうやってあなたを探すの？」

「村で俺を知らない奴なんていないさ。きっと亜丁村に来てよ!!!」

彼は手を振ると、とっくに見えなくなってしまった騎馬隊を追いかけて小走りに去っていった。

青年が行ってしまうと、あまりに突然の出来事がうそのように思えてくる。

本当に彼はあの時の少年なの!？」

再会できた事がものすごく嬉しかったが、同時に現在の彼が既にあの時の少年ではなくなっている事が、ほんの少し寂しくも感じられた。三年前の思い出が強く心に刻まれていた私は、無理な望みだとは知りながらもやっぱりあの時の少年に会いたかったのだ。

彼の方はさぞかし驚いた事だろう。突然、行きずりの旅行者に睨み付けられ呼び止められたと思ったら、いきなり飛びつかれてしまったのだ。

三年前私が少年と一緒に過ごしたのは、たった二日間の

うちの数時間だけだった。いくら思いがけない再会だとしても、我を忘れて抱きつくほど特別な関係でもなかったし、彼にしてみれば私など毎年大勢訪れる観光客の一人に過ぎなかつたらう。あの場で驚いた青年に飛び退かれでもしていたら、私の面目は丸つぶれになるところだったが、彼はそんな私に動じる事なく体当たりしてきた私をちゃんと抱きとめてくれると、一緒に再会を喜んでくれた。やっぱりチベット族の男は肝が座っていてかっこいいのだ。

人懐こい彼の性格からすれば、親しくなった旅行者とハイキングに行く程度の事は、そうめずらしくもなかつたらう。それを思うと彼が私の事をちゃんと覚えていてくれたのが嬉しかった。

それにしても・・・懐かしい友人との再会はこれまでも何度か経験したが、こんなドラマチックな再会は初めてだ。美しい大自然を背景に、思いがけない出会いの喜びに思わず駆け寄って抱擁をかわす二人・・・まるで映画のシナリオみたいじゃないか。三年前の湖畔に次いで、又しても私の人生史上に残るロマンチックだ。

そしてこの時、やはり私は思ってしまったのだ。

ああ～！せめて私が20代だったら・・・彼に抱きついたってもっと絵になったのに～！！

先ほどまで杖に頼ってヨロヨロと歩いていた私は、思い出の少年と再会できた喜びにすっかり足どりも軽くなっていた。今日の目的地である洛絨牛場はもうすぐだ。前方にはバームクーヘンの断面を思わせる年輪のような筋が幾重にも入った岩山が見えてきた。

うわ～！こんな山もあったよね～！！懐かしい～！！

そうだ、すっかり忘れていたが、この山も亜丁の風景の中で印象深かったものの一つだ。いったいどうしてこんな不思議な模様の山ができたのだろう。様々な堆積物が少しずつ重なって岩となった土地が隆起したのだろうかと思えたが、並んでいる隣の山には筋模様など付いていない。地質学など普段はそれ程関心のない私でも、この辺りの土地の成り立ちは興味深く思えた。亜丁の山は標高が高いため樹木などは殆ど生えておらず、むき出しになった山肌がはっきり見て取れる。青い岩山の隣には赤い岩山があり、鬼ヶ島を思わせるトゲトゲ岩山の隣にあるのは普通の岩山だ。同じ場所に並んでいても、それぞれの山様が違うのが不思議で面白い。できることなら地質学者のような人に同行してもらい、土地や山の成り立ちを一つ一つ解説してもらいものだ。

そんなことを思いながら歩いているうち、いよいよ洛絨牛場の景色を代表する靈峰「央邁勇」^{ケンマイヨン}の氷河から溶けて流れ落ちる三条の滝が遠くに見えてきた。

時刻は午後遅くなり、そろそろ夕暮れが近づいてい

た。少年と出会えた喜びで忘れかけていたが、私達の今夜の宿がどうなるかはまだ決まっていないのだ。風雨がしるげる場所さえあれば、最悪、野宿もいとわない心づもりでやってきている私は、何とかなるだろうと思っていたが、ウィン是不安そうだった。

青年の話では洛絨牛場に宿はあるとの事だった。しかしその後道で会った土地のおばさん二人組みは、もう宿は閉めているから泊まる事はできないと言う。そして道端の畑の向こうに立っている納屋のような小屋を指差すと、あそこはウチの小屋だから一人10円で泊まらせても良いと営業までされていた。

「あ～、牛場に行っても無駄だよ。一週間前に宿は閉めたんだ。私の小屋を貸してやるから泊まりなさいよ」

これは沖古寺の宿の女将と同じセリフだ。もう誰の言ってる事が本当なのかもわからない。しかしここまで来たら、私は洛絨牛場まで行かない事には気がすまなかった。

おばさん達には牛場まで行って宿が無かったら戻るか、と言い残して再び歩き出す。しばらくして今度は徒歩で下ってくる若い中国人旅行者のグループと出会った。やはり正確な情報は旅行者同士に限る。牛場から下ってきた旅行者なら宿の状況についても知っているに違いない。私とウィンはすかさず彼らを呼び止めた。

「你好！！ねえ、牛場に宿はある！？」

「もう閉まっていて泊まれないの」

先頭を歩いていた女性が答えた。

やっぱりそうなのか～。予想していた事とはいえ少しガッカリした。

「人はいるの？」「いるけど、泊めてくれないのよ！」

「お願いしても？」

「駄目なのよ！！ここの人間って全然親切じゃないのよ！」

「じゃあ宿はないの？」

「ない事もないわ、土地の人が泊まらないかと言ってくるから」

泊まれる場所があるのか無いのか、なんだか曖昧な様子だが、やはり牛場の宿がシーズンを終えて閉まっているというのは本当の話だったのだ。しかし宿の小屋番がまだ居ると言うのなら、何とかかなりそうじゃないか。先ほどの彼女はああは言ったが、日暮れ間際に女性が路頭に迷っているのだ。宿代だってちゃんと払うし、御願ひすれば小屋の片隅くらいには泊めてもらえるだろう。

大丈夫！何とかなるよ～！

私はいつものように楽観的に考えをまとめると、もう目前に迫っている懐かしい洛絨牛場にむかって歩みを進めた。